

→オリンピックの父、嘉納治五郎と灘の三酒造

2018. 12. 9 (日) カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第 540 回 参加報告

国道 43 号線を渡り、第 23 代大阪相撲の横綱「大木戸森利右衛門生誕地碑」の説明板のある公園へ行きました。幕内優勝 10 回、うち 5 回が全勝優勝で「大坂に大木戸あり」と言われた人で、生家はお酒の樽を作っていたのだそうです。そして隣は「魚崎八幡宮神社」で、東側の鳥居を入ったすぐのところに、松の切株が置かれていました。「神依松」というのだそうで、神功皇后が船の艫綱をこの松に繋いで占うと、神の御告げがあり、廣田神社、生田神社、本住吉神社、住吉神社にそれぞれの神の分身を祀ると無事に航海が出来たという言い伝えがあるということでした。

社務所では、灘五郷の絵地図を近くに出して見せていただきました。海沿いの浜街道に各蔵元の酒蔵がずらっと並び、海では樽廻船がいままさに出帆するところで、その繁栄ぶりがしのべれます。絵地図には、JR(国鉄)や阪神の線路も描かれていますので、そう古いものではなさそうでしたが、浜街道沿いのイメージがはっきり掴めました。

いよいよ酒蔵巡りです。昼食をはさんで最初に行ったのは山邑酒造の「櫻正宗記念館」でした。櫻正宗の創業は寛永 2 年(1625)だそうで、伊丹から灘に移り、西宮神社の南から湧出する「宮水」を発見して「灘の酒」を質量ともに全国一に導きました。

浜街道を西へ向かうと本嘉納家の「菊正宗酒造記念館」です。後藤守館長さんから、嘉納治五郎と菊正宗の関係をお聞きしました。本嘉納家に対し、治五郎は浜東嘉納家で生まれています。最後にその「千帆閣」と呼ばれた約 800 坪の邸宅跡へ行くことになっていますが、紀淡海峡を航行する船が昼に映ったという屋敷跡に、神戸市が近々その標を設置するようです。これも、大河ドラマ「いだてん」のおかげかもしれません。



後藤館長による酒造り工程の説明

酒造りの工程の説明では、丹波から杜氏を招き、六甲おろしの吹く寒い冬に、半年がかりで日本酒を作っていたという、昔の人の苦労がわかりました。

夢枕獏の『東天の獅子』には、嘉納治五郎の講道館柔道がオリンピックに採用されるほど外国にも広まったことが書かれていました。しかし国際的な「JUDO」は、嘉納治五郎が当初考えていた「柔道」とは異なったものに育っていったのでした。



飲み比べをする会員の皆さん

最後に、「白鶴酒造資料館」へ行きました。三酒造巡りで、それぞれ試飲のお酒を頂いたり、お土産を買ったりし、「嘉納治五郎旧宅跡」で解散しました。皆さんお酒が入っているので、それぞれ千鳥足で家路についたのです。

<報告：池内 洋>